様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6 月　20 日現在

研究種目：若手研究[B]
研究期間：2008 年 度 ～ 2009 年 度
課題番号：20720134
研究課題名（和文）　英語における方向を表す副詞的表現の共時的・通時的研究
研究課題名（英文）　A Synchronic and Diachronic Study of Directional Adverbials in English

研究代表者
石崎　保明（ISHIZAKI YASUAKI）
名古屋産業大学・環境情報ビジネス学部・准教授
研究者番号：30367859

研究成果の概要（和文）：
本研究の主たる成果は、様々な歴史的言語資料から収集した用例に基づき、英語における方向を表す副詞が文法化の事例として認定可能なものから認定不可能なものまで多様な歴史的発達を遂げていることを実証し、これらの歴史的発達を用法基盤モデルの観点から解明した点にある。これにより、用法基盤モデルが、文法化現象のみならず、様々な言語変化を説明する理論として利用可能であることを示すことができた。

研究成果の概要（英文）：
One of the main findings of this research is that, on the basis of examples collected from various historical linguistic corpora, there are some distinctive kinds of historical development in the directional adverbs in English, such as grammaticalization and retraction, and they can be explained in terms of the Usage-Based Model approaches to grammar. One of the major consequences of this analysis is that the Usage-Based Model can be used to explain wide varieties of language change, as well as grammaticalization phenomena.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	500.000	150.000	650.000
２００９年度	700.000	210.000	910.000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,200,000	360.000	1.560.000

研究分野：英語学
科研費の分科・細目：言語学・英語学
キーワード：方向を表す副詞的表現、用法基盤モデル、文法化、語彙化

１．研究開始当初の背景
文法化(grammaticalization)とは、一般に、動詞や名詞のような語彙的な要素から助動詞や前置詞のような文法的な要素へ、あるいは文法的な要素からさらに文法的な要素へと進む言語の歴史的な変化であると想定される。例えば do の一般動詞から助動詞への変化は文法化の事例である。この文法化にみられる言語変化の方向性については、例外が極めて少ないと考えられており、一方向性仮

説とよばれることがある。

文法化現象は、英語のような個別言語内にのみ観察される現象ではなく、通言語的に観察される普遍的な言語変化であると考えられており、その言及は、古くは 20 世紀初頭の文献にも見られる。しかしながら、文法化現象が盛んに議論されるようになったのは 1980 年頃以降であり、この時期は、言語の使用者である人間(ヒト)の身体性に着目し、言語現象の認知的要因を探求する認知言語学が注目を浴び始めた時期とも重なる。言語変化の普遍的傾向を探求するにあたって、言語そのものの“内在的”要因だけでなく、言語を使用する認知主体の様々な能力といった、当時としては“外在的”あるいは“周辺的”とみなされていた要因をも研究の射程に入れるようになったことは、本研究の歴史的な研究上の位置付けを考える上できわめて大きな意味を持つ。

近年の文法化研究においては、さらに、Lehmann (2002)、Haspelmath (2004)、Himmelmann (2004)等にみられるように、言語の歴史的変化における文法化現象と語彙化(lexicalization)とよばれる現象との関連性に強い関心が向けられている。語彙化とは、一般に、文法的な要素が語彙的な要素へと進む言語変化であり、文法化とは反対のプロセスであると想定されている。よって、語彙化現象の事例が数多く存在するということは一方向仮説の妥当性に対して疑問を提起することを意味する。

この文法化と語彙化に関する研究に横たわる問題として、文法化や語彙化の詳細な定義、および、例えば各々のプロセスが言語変化の対極にあるのか並行して進行可能なものなのかといった理論上の位置付けに関して、共通の理解が得られていないということを挙げることができる。とりわけ「文法(grammar)」と「語彙(lexicon)」という、言語学における用語としての汎用性の高さは、問題解決の上で大きな障害となっている。

このような状況に一石を投じた注目すべき研究として、Brinton and Traugott (2005)(以下、B&T)がある。B&T は、文法化も語彙化もともに言語使用にのみ、そして文脈においてのみ漸進的に生じる歴史的プロセスであると仮定し、前者では生産性が増加し、後者では生産性が減少するといったように、その発達の方向性は異なるものの、生産性の観点から両者が一方向的に進行すると主張した。この定義によれば、これまで語彙化(=文法化の反例)として挙げられてきた事例の多くは漸進性を伴わないため、議論の対象から外れることになる。

B&T の文法化と語彙化の定義で重要な意味を持つ生産性とは、ある言語要素が新たにどのくらい多くの種類の要素と共起可能であるかを示す尺度であり、テキスト内に観察される生起数(トークン頻度)や、どれだけ異なる種類の要素と共起したかをカウントするタイプ頻度とは異なる。

ところで、上述の通り、近年の文法化の研究の進展の背景には、認知言語学の進展が重要な役割を果たしているものと考えられる。この認知言語学において広く採用されている言語変化のモデルに用法基盤モデル(Usage-Based Model、以下 UBM)があり、これによれば、ある言語表現のトークン頻度の高まりが構文としての定着をもたらし、タイプ頻度の増加がより抽象度の高いスキーマの定着をもたらし、その結果として言語表現の生産性が高まると想定されている。従来の、特にヨーロッパを中心に盛んに行われている文法化・語彙化研究と、特に北米を中心に行われている UBM に基づく言語変化の研究は、これまでも若干の相互参照はあるものの、基本的には独立して展開されてきた。この背景には、UBM の研究の歴史が浅いことに加えて、文法化の研究者とは対照的に、文献学的な歴史研究をその研究基盤に持つ認知言語学者の数が、世界的にみても圧倒的に少ないことがある。

このような状況の中、B&T と UBM は、一方向性の考え方や頻度と生産性の関係等については相違があるものの、

(1)言語変化を生産性の観点からとらえている、
(2)文法と語彙は明確に区別できるものではなく、概念的な連続性をなす、
(3)言語変化は文脈における話者と聴者の相互作用の結果としてもたらされる、

等、理論の根幹にかかわる部分で理念を共有している。これは、両者が理論的に統合されるための環境が整いつつあったことを意味する。

２．研究の目的

本研究を始めるに当たって、研究代表者は英語における副詞的表現の歴史的発達を調査し、文法化や語彙化が一方向的に進行しない事例や、両者が同時に起こっていることを示す事例を得ており、これらの事例は、B&T をはじめとする従来の文法化・語彙化の理論的研究では捉える事が困難であるが、UBM の観点からは適正に捉える事が見込まれて

いた。しかしながら、その時点で発掘した言語事実は OED や先行研究の調査等で得られた限られた言語資料からであったため、言語発達の記述的な妥当性をさらに高めるためには、より多くの言語資料にあたり、データを収集する必要があった。また、理論的妥当性を高めるためには、さらに先行研究を詳細に検討することによって、B&T と UBM の“安易な折衷案”とならないよう、精密な理論の構築を行う必要がある。

以上の観点を踏まえて、本研究では、英語における方向を表す副詞的表現の歴史的発達に焦点を絞り、その統語的・意味的に競合関係にある言語表現の発達に配慮しながら詳細に記述し、さらにその歴史的発達過程を B&T に代表される文法化・語彙化理論と、UBM とを理論的に統合させた言語変化モデルに基づいて説明することを目的とした。とりわけ補助金の交付を受けた期間内においては、

(1)副詞的名詞類 away、forth、out の歴史的発達における調査および記述、
(2)文法化理論と UBM の理論的統合、
(3)(2)での研究成果を用いての(1)の説明、

の 3 点について研究を行った。

３．研究の方法
本研究は、
(1)方向を表す副詞的表現の歴史的発達に対する実証研究と、
(2)UBM に基づく文法化･語彙化の理論研究、
の 2 つに大別される。

(1)については、ICAME 等の電子化された言語コーパスや書簡集等から用例を採集し、方向を表す副詞的表現と共起する動詞のトークン頻度、タイプ頻度、およびその生産性の分布や変化を表すデータを作成し、同時に文法化もしくは語彙化を示す事例がどの時期からどの程度観察されるのかを、その生起する文脈とともに提示する。

(2)については、文法化や語彙化の定義、およびそれらに分類される事例、そして普遍的傾向としての文法化における一方向性の想定についてはおおむね B&T にしたがうが、例えば英語の移動動詞 wend がそうであったように、

①言語変化のある時期において複数の意味が共存する重層化という現象により、ある言語表現の中に文法化と語彙化が同時に進行することがありうること、
そして B&T の頻度の扱いを精密化し、
②語彙化の進行にとって、タイプ頻度の増加は必要とはされないが、ある程度のトークン頻度は必要とされる、
という 2 点において B&T の文法化・語彙化モデルを修正した上で、B&T の観察を UBM に還元する形で理論的融合を試みた。

４．研究成果
英語における方向を表す副詞類のうち、2008 年度は特に forth の歴史的発達とその理論上の位置付けに焦点を絞って研究を行った。まず、OED その他の資料から forth の歴史的発達を調査した結果、forth は、古英語期から中英語期にかけて高いトークン頻度を示しており、その時代の用例の中には、「方向」という語彙的意味から、描写される行為の完了や継続といった相(アスペクト)的意味を獲得したと思われる例も見られる。しかしながら、初期近代英語期以降は forth の頻度や生産性が減少し、その意味の一部が out に引き継がれたことを示す事実も観察される。これは、少なくとも初期近代英語期には out と forth が意味的な競合関係にあり、この競合が唯一の原因かどうかは判らないが、英語史において forth が淘汰されていくプロセスが観察される。以上のことから、forth の歴史的発達は、B&T における「文法化」の事例とみなすことはできず、むしろ Haspelmath (2004)における「撤回(retraction)」の事例に相当すると主張した。「撤回」とは、ある言語表現が、一旦は意味拡張の傾向を示すものの、その後、その拡張した意味が何らかの理由で用いられなくなり、意味拡張が始まる前の段階の用法にその使用範囲が制限されていく言語変化である。

上記の内容は雑誌論文②④と学会発表③として公表した。B&T では、英語本来語である方向を表す副詞を含む句動詞は文法化の事例であることが示唆されているが、本研究では、forth のように文法化とはいえない事例が存在することを示した点は意義がある。

さらに、この撤回の事例だけでなく、B&T が提案する文法化や語彙化といった現象もまた、使用頻度と生産性の因果関係を認めた言語変化のモデルである UBM において適正に捉えることができることを示した。この内容は雑誌論文③として公表した。これにより、B&T と UBM の理論的融合の可能性が示されたことになる。

2008 年度後半から 2009 年度にかけては、away と out の歴史的発達にも調査対象を拡大し、それらの理論的位置付けに対して文法化理論と用法基盤モデルを統合させた理論的枠組みで説明を試みた。調査の結果、out

は歴史を経るにつれてトークン頻度、タイプ頻度、および生産性が増す発達を示したのに対して、away は out ほど高いタイプ頻度や生産性を示さないものの、初期近代英語期以降に相的意味を獲得した点で out と同様、文法化の事例とみなすことができると主張した。この内容は雑誌論文①として公表した。この away と out にもみられるように、同じ方向を表す副詞であっても、同じ速度で文法化を受けるわけではなく、その副詞の意味や使用環境によって言語変化の進行の速度が異なることを示したことは、UBM に基づく文法化の理論構築を行う上で重要な示唆を与えるものであると考えられる。

B&T における文法化・語彙化理論と用法基盤モデルの理論的統合が可能であることについては、雑誌論文①③においても言及し、1 編の書評論文(その他①)の中でも考察し、公表した。さらには、away や out の歴史的発達の調査結果を含めた本研究課題の記述的・理論的分析の総括として、文法化の研究者が集まって初めて行われた文法化に関する国際ワークショップ(学会発表①)において採択を受け、口頭発表を行った。これは、伝統的に文法化研究が盛んな北欧諸国の 1 つであるオランダで開催されたものであり、その地で文法化とそれに関連する様々な言語変化が UBM において説明可能であることをと示したことは大きな意義があるものと考えている。

また、国内学会シンポジウム(学会発表②)において口頭発表した内容は、方向を表す副詞を含む句動詞の発達を文法化の観点から考察したものであり、これは、本研究が、単に方向を表す副詞の歴史的発達を説明することにとどまらず、今後の句動詞の意味的・歴史的研究にも適用可能であり、さらなる発展性をもつものであることを意味している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① Ishizaki　Yasuaki (2010) “Some Notes on *Away*,”Hirozo, Masayuki Ohkado, Tomoyuki Tanaka, Tomohiro Yanagi, and Azusa Yokogoshi (編) *Synchronic and Diachronic Approaches to the Study of Language: A Collection of Papers Dedicated to the Memory of Professor Masachiyo Amano* (共著。執筆者 34 名のうち掲載順は 6 番目、執筆担当個所は 71- 83)(英潮社フェニックス) 査読無

② Ishizaki　Yasuaki (2009a) "A Usage-Based Analysis of the Distribution of *Forth* in the History of English"『近代英語協会』第 25 号 pp.41-62(近代英語協会)査読有

③ Ishizaki　Yasuaki (2009b) “On the Status of Lexicalization in Language Change Model,”Mutsumu Takikawa, Masae kawatsu, and Tomoyuki Tanaka (編) *Ivy Never Sere*(共著。執筆者 33 名のうち掲載順は 21 番目、担当執筆個所は pp.341-353)(音羽書房鶴見書店)査読無

④ 石崎 保明 (2008)「方向を表す副詞 forth の歴史的発達について」、日本英文学会第 80 回全国大会 Proceedings pp.41-43.(日本英文学会)査読無

〔学会発表〕（計 3 件）

① 石崎　保明(2009a)「方向を表す副詞を含む句動詞のイディオム性」日本英文学会中部支部第 61 回大会シンポジウム 「イディオム化と構文化—近代英語を中心に—」(於 愛知学院大学)査読無

②Ishizaki　Yasuaki (2009b) “On the Historical Development of Directional Adverbs in English: A Usage-Based Perspective”Current Trends in Grammaticalization Research (於 University of Groningen (フローニンゲン大学), オランダ)査読有

③ 石崎 保明 (2008)「方向を表す副詞 forth の歴史的発達について」、日本英文学会第 80 回全国大会 (於 広島大学)査読有

〔その他〕

① 石崎 保明 (2009) 書評：Bybee, Joan (2006) *Frequency of Use and the Organization of Language*, New York: Oxford University Press 『中部英文学』第 28 号(日本英文学会支部統合号第 1 号)(日本英文学会中部支部)査読無

６．研究組織
(1)研究代表者
石崎　保明（ISHIZAKI YASUAKI）

研究者番号：30366859

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：